中国の「紅色旅遊」

——共産主義（コミュニズム）から消費主義（コンシューマリズム）へ、革命（レボリューション）から余暇（レクリエーション）へ——

張　恩華

はじめに

二〇〇四年一二月、中国共産党（以下「中共」）中央弁公庁と国務院弁公庁は「二〇〇四～二〇一〇年全国紅色旅遊発展計画綱要」（以下「綱要」）を発表した。年末であったため、年末決算と重要な祝日（元旦と春節）を間近にした政府各機関や関連業界は、「綱要」発表にあたって、宣伝を大々的にはおこなわなかった。二〇〇五年二月二二日、中国の伝統的な祝日の春節の二週間後、新華社など国内の主要な報道機関は「綱要」が提唱した紅色旅遊計画を一斉に報道しはじめ、関連する社説を発表した。各省、市、地方の観光関連部局や新聞などのメディアも続々と追随し、それに呼応するように地方での実施方法や具体的な観光の内容が登場する。一時期、全国で「紅色旅遊」に関する報道、宣伝がくりひろげられ、旅行の実践活動も展開された。

「綱要」が公表される前でも「紅色旅遊」という表現は使われていたが、それは党と政府指導者の視察時の講話や断片的な報道の中に散見される。「紅色旅遊」が大量、集中的かつ頻繁に登場するのは二〇〇四年、つまり中華人民共和国成立五十五周年、中国労農紅軍長征七十周年の年であった。二〇〇四年一月、鄭州で開催された全国旅遊工作会議の席上、江西省はじめ北京、上海、河北、福建、広東と山西の七つの省と市は「七省市発展紅色旅遊鄭州宣言」を出した。この宣言には全国的に反響があり、他の省や市

はこの呼びかけに次々に応じた。二月、イデオロギー部門主管の中共中央政治局常任委員李長春は「積極的に『紅色旅遊』を発展させなければならない」と指示した。これにより、中央宣伝部、中央文献研究室、国務院発展研究センター、国家発展改革委員会、国家旅遊局が共同で、調査研究グループを組織し、三月と五月、江西、湖南で二度の紅色旅遊発展状況調査を行い、紅色旅遊計画の準備をはじめた。二〇〇四年五月二一日には『人民日報』理論版は一面トップに「紅色旅遊ブランドを打ち立て、紅色旅遊の大きな流れを促進しよう」という評論を掲載した。八月一二日、『人民日報』は紅色旅遊計画の正式開始と二〇〇五年を「紅色旅遊発展年」にすることを発表した。同時に、報道機関も大規模に世論醸成を始めた。二〇〇四年七月一〇日、七月三一日、八月一二日、中央電視台はプライム・タイムのニュース番組『新聞聯播』で、それぞれ一分二三秒、一秒三〇秒、二分と続けて三回、湘潭観光について報じた。これは時事問題や政治に関する報道が中心の『新聞聯播』のなかでは特別な意味があった。湘潭の近くの韶山は毛沢東の出生地であり、共産党が指導した初期の農民革命発祥地のひとつであり、はやくから人民共和国を育んだ象徴であった。同年七月末「紅色之旅、百万青少年湘潭・韶山旅遊」が、愛国主義教育運動の一環として毛沢東の故郷で幕をあけた。

中国では一般の人々の生活のなかで、観光の歴史はまだ浅い。おおよそ一九八〇年代の改革開放でようやく広がり始めたもので、一九九〇年代に市場経済が定着して以降、次第に盛んになっていった。しかし「紅色旅遊」という一種の実践活動は、かなり以前から存在していたのである。一九八〇年代、小中学生の「愛国主義教育」はすでに紅色旅遊の雛形といえるものであり、祝日や休日、あるいはサマー・キャンプのかたちで、烈士陵園や「革命根拠地」の遺跡を集団見学していた。しかしながら、紅色旅遊の精神は常に語られてきた「長征の足跡をたどる」ことに発するものである。そのため、長征の歴史的由来と、その現代中国における歴史的意義を検討する必要があるだろう。

一九三四年一〇月一六日、国民党軍の討伐を避けるため、八万六〇〇〇名の紅軍将兵は党の指導の下、江西の雩都を出発し、生き残りをかけて西へ退却した。一年の苦難の行軍で一一の省を通り、一九三五年一〇月陝西省北部に達した。この時点での生存者は一万人足らずだった。これを中国史では一般に「長征」と呼ぶ。指摘しておかねばならないのは、この長征が主に中国労農紅軍第一方面軍すなわち中央紅軍の経路であるということである。広義の長征ならば、紅軍の他の諸部隊の退却経路をも含む。張国燾が率いた第四方面軍は一九三二年一〇月鄂豫皖根拠地から西へ退却し、一九三五年六月第一方面軍と合流後も独自の行

動を取ったが、最終的に一九三六年一〇月に陝西省北部へ到着している。賀龍、蕭克が指揮した第二、六軍団は一九三四年一〇月湘西から撤退し、まず第四方面軍と合流し、その後陝北に到達した。徐海東の第二十五軍は湖北、河南を退き、陝西省へと到着し、他の紅軍と衝突している。[1] 張国燾の退却は中央紅軍に二年先立つ。当時、張国燾は中華ソビエト共和国臨時政府副主席であったが、この軍事行動は中共中央が了解したものではなかったため、「逃亡主義」の誤りを犯したという批判を受けることになる。後に、張国燾は毛沢東との権力闘争で失脚し、蔣介石を頼ったため、現在の中共党史では裏切り者として登場する。初期の長征史の編纂では、第一方面軍の艱難辛苦と、軍事行動での指導者毛沢東の英明さ、偉大さを集中的に突出させた。そのため第一方面軍の行軍経路が長征の主要ルートとされ、地図に刻み込まれたのであった。

長征の歴史的意義については贅言を要すまい。わずか二〇年のうちに、長征は「勝利の大逃避行」から不朽の建国神話へと格上げされたのである。一九四九年から現在まで、どのような政治的動揺がおきようが、長征の歴史的地位が揺らぐことはなかった。過去五〇年間、長征は中華人民共和国の祝典文化のなかできわめて重要な地位を占め、その盛大さは中共成立や中華人民共和国建国記念に次ぐほどである。五年、十年ごとに大規模な祝賀式典や記念活動がおこなわれ、これには長征を記念した集会や回想録の出版、関連した文学や芸術作品の展示などが含まれている。なかでも「長征の足跡をたどる」ことは、長征記念活動として一種壮観なスペクタクルである。これに着目してみたい。

「長征の足跡をたどる」という行為は一九五〇年代、一九六〇年代にあっては革命の伝統の継承とみなされ、参加者の大半は中華人民共和国と同年齢の人々——人民共和国成立前後に生まれた若者たちだった。彼らは長征の時代には間に合わなかったが、父親の世代と学校の教育を通じて長征の歴史を理解し、親しみを持ち、紅軍長征の道程をあらためて踏破することで長征の精神を体得し、自らの革命的意志を鍛えていった。こうした活動は一九六〇年代中期の文化大革命の全面勃発前後に盛んになっていった。具体的には、当時の紅軍の長征の経路に沿ってただ進むのではなく、多くは歩いてもとの革命根拠地へゆき、後の革命の聖地で革命精神の洗礼を受けたのである。女流作家楊沫の息子である老鬼（筆名、本名馬波）は四人一組になって北京を徒歩で出発し、太行山脈を越えて延安へ挺進しようとした、と回顧録『鉄と血』に記している。その計画は途中で挫折するが、こうした活動は当時にあっては広く見られるものであった。[1] 「文革」期の老鬼のような個人の自発的な周遊計画を除いて、集団的あるいは組織的な紅衛兵の

「大串連運動」（経験大交流運動）もまた、「長征の足跡をたどる」ことと同工異曲であった。積極的に、造反に参加した若き紅衛兵たちは、あちこちから当時の紅色首都北京へ向かったが、それはその他文革に参加した若者たちが全国各地から延安へと赴いたのと同じことで、革命指導者の尊顔を拝すること、革命の聖地を訪れることを心から望んでいたのだった。「長征の足跡をたどる」こととその他の革命に関する記念活動には、根本的なちがいがある。前者は、正真正銘の肉体的試練であり、外在的な身体的鍛錬を通して内在的な精神の洗礼に到達し、精神肉体両面で革命の実践と精神の統一とを実現させようとするのである。その他の革命の記念行事では、参加者にこれほどまでに全身全霊を捧げるよう求めることはない。例えば、抗日戦争勝利記念活動では、あらためて抗日戦争の戦場に行って戦争を追体験することを目的とはしていない。ところが、長征に関し何かしらを書くという活動は「長征の追体験」と密接な関係がある。こうした肉体的な試練は、革命に対する忠誠心を最もよく表現できるため、文革での「過去の苦しみを思いだし、現在の幸せを味わう」[2]という背景のなかで、さらなる効果をあげた。

一九八〇年代、九〇年代に至り、文革は終わりを告げ、そして「長征の足跡をたどる」ことへの情熱も全国を覆った政治熱が次第に消散していくに従って低下していった。しかし、文学、映画、創作あるいは歴史の編纂にかかわらず、おおよそ長征に関わろうとすれば、長征の現場を再び訪れることが、成功の前提条件となっていた。アメリカ人ジャーナリストのハリソン・ソールズベリは長征の歴史を執筆するため、主に自動車で長征ルートの大部分を走破し、当時の紅軍の重要な戦場に自ら赴き、『長征――語られざる真実』を書き上げた。これは、英語圏ではスノーの『中国の赤い星』[3]のあとに出版された長征に関する初めての詳細な書物である[2][4]。ソールズベリは中国語に通じていないため、原資料や取材の内容に関して状況を正確に把握していない部分も見られるが、全体として言えば、スノーが毛沢東へのインタビューを基に記した長征の視点の限界を補うに充分だった。ソールズベリは長征のルートをたどり、紅軍のたどった長い道のりが危険と困難の伴う容易ならざるものであったことを体験したのであった。それゆえに、彼の本もまた長征がいかに驚くべきものであったか、ということをしばしば読者に喚起するのである。一九八六年、長征勝利五十周年を記念して、中国人民解放軍は何人かの従軍作家を集め、長征の道沿いに民謡を採集し、『解放軍文芸』の記念特集号に三本の中編小説とルポルタージュをまとめて掲載した。これは建国以来主流となっていた革命の叙述の枠組みをはじめて突破したものであり、歴史の再認識と創作の試みの融合であった[3]。一九九六年、べ

テラン作家魏巍は長征を描いた長編小説『地上の赤い帯』（原題『地球上的紅飄帯』）を出版した。作品自体の質や反響の如何を考えずに、魏巍は「前書き」や「後書き」、座談会での発言などで、繰り返し自分が高齢であることや心臓冠動脈の障害、手足の怪我など多くの困難を克服し、ついに長征の行程の大部分を完走したことを強調し、「長征の足跡をたどる」ことがこの小説の執筆にいかに重要であったかを述べている。生活に深く入り込むことは、作家が創作の素材を捜すための重要な源である。しかし、「長征の足跡をたどる」ということは、とっくに生活で体験できる局面を逸脱している。魏巍が創作の背景を説明するとき、長征については作品の現場に自ら赴くことが不可欠であることを特に強調する。これは、「自ら体験」した者のみが、長征を描く資格があると暗に述べていることである。しかし、「自ら体験」したことかどうかは、それ以外の革命史を題材とした創作活動の中においては問題とされることはないのである。

建国から一九九〇年代に至り、中国は政治的のみならず経済的、文化的に急激な変化を遂げてきた。しかしながら、「長征の足跡をたどる」ことは各時代ごとに特別な意味合いを持ってはいたものの、その意図するところは常に変わることはなく、人民共和国発展の源泉へさかのぼり、革命の記憶に思いをはせ、紅軍と共産党の指導の導きの光を再現することであった。このような行為は、ある意味からいえば信者が遠くまで聖地巡礼に赴くのと性格が似ているといえる。聖地巡礼との類似点としては、信者が巡礼の過程のなかで経験するいかなる艱難辛苦も、すべて神が遭遇した困難とは比較しようがない、ということである。「長征の足跡をたどる」こともまたそれと同様に、後世の人がどのように努力し、当時の紅軍の行程通りに歩いたとしても、毎日、紅軍と同じ速度で行軍したとしても、長征のコピーとなることは不可能、ということである。たとえ近代的な科学技術の手助けがあっても、長征の足跡をたどることは依然容易ではなく、途中の地形の険しさや特別な土地、特殊な気候は現代人にも昔と変わらずに挑みかかってくる。こうした長征の再現は、長征の偉大さをあらためて証明することになる——その偉大さは後世の人があらたに繰り広げる技量や試みを凌駕しているのであり、歴史上、比肩するものはなく、後世の人が再現したとしても、せいぜい長征のまねごとでしかなく、いかなる形での再現も最初の長征に挑戦したり、それをこえたり、取って代わったりはできないのであるし、長征の足跡をたどるという行為は、長征に輝きと伝奇的色彩を加えるばかりなのである。

紅色文化の復興

二一世紀に入り、長征を巡る話題が次々と現れ、あらたに「長征フィーバー」なるものまで現れた。そのなかで注目すべきものとして二〇〇二年の「長征基金会」（後に「二万五千里文化普及センター」と改称）による文化と芸術の旅――「長征：行軍するビジュアル展」が挙げられる。一群の内外の現代芸術家が集まり、長征の道筋に沿って芸術創作活動や展覧会を開催し、芸術と大衆の関係などを議題とする討論がおこなわれた。この隊列が瀘定[5]に到着して活動は一段落したが、主催者である盧傑の北京芸術村七九八工廠の長征芸術工房は、中国現代芸術の重要な拠点となった。ウェブ上（www.longmarchspace.com）でも中国語と英語により、中国および海外の現代芸術家が長征に関連した芸術の話題を議論するためのバーチャル広場を提供している。今回の長征フィーバーは、一面では以前の長征記念活動のなにがしかの特徴を有しているが、別な面では新時代の内容が注ぎ込まれている。なかでも際立っているのは、消費活動および市場経済との密着である――紅色旅遊とは、まさにこうしたことを背景に、時勢に応じて生じたものであった。総合的に見て、紅色旅遊隆盛の要因と志向には、おおよそ二つ挙げられよう。ひとつは経済を発展させ、国民総生産の増加を刺激したことであり、ふたつには中国が時を移さず「紅色」文化復興の意を汲み、政策や法律を通して紅色遺産のなかで利用価値のある観光資源を体制化し、したがって紅色遺産という政治情報の経済効果への転換を実現したことである。

まず、二〇〇三年のＳＡＲＳ流行は中国にはかりしれない経済的損失をもたらした。ＳＡＲＳ流行の間、人口流動はほとんど停止し、人口流動による刺激を必要とする観光業は間違いなく重傷を負った。同時にＳＡＲＳ流行によって国際的にも中国はマイナスの影響をこうむり、中国への海外からの観光客は大幅に減少し、中国観光市場が海外からの観光客の信用を回復するにはなお時間が必要だった。ＳＡＲＳ流行後の経済調整と復興計画では、国内の人口流動を奨励し、国内経済の消費活動を刺激し、内需を引き出すことが主要な任務となった。この他にも、観光が低コスト化をはかり消費産業を速やかに回復させることについては、これ以前の内需拡大にも成功例があった。一九九八年、東南アジアを金融危機が席巻した時、中国経済は甚大な被害をこうむった。「黄金週」（ゴールデン・ウィーク）政策はこれを背景に登場したが、それは消費を刺激し、国民総生産増大を推進するためであった。一九九九年九月一八日、国務院は「全国祝日および記念日休日法」を公布し、法定休日の増加を決定した。旧正月の春節と五月一日

のメーデー、一〇月一日の国慶節の法定休日を三日間とし、さらに前後の二日を連休として加え、毎年七日間の長期休暇を三つ設けた。どの長期休暇でも、常に親族訪問旅行による大量の人口流動があり、休日にともなう消費は中国経済の関心的ともなって、この三つの長期休暇は「黄金週」と称された。純粋に経済方面から見れば、黄金週は予定通りの効果と利益を実現した。ただ、関連産業との連携が不完全であったため黄金週は多くの問題も生み出した。例えば交通渋滞や治安管理の不備などは経済効果を割り引かせることとなった。国内の観光客の消費者心理も次第に成熟し、多くの人々が旅行以外で黄金週を過ごす方法を選択するなど、長期休暇の旅行でのミツバチの群れのような現象は次第に好転しつつある。なおかつ、二〇〇四年のSARS騒動が収まるに従い、海外の旅行市場は中国人観光客に対しても門戸を開放し、このところ中国人観光客が香港やマカオ、東南アジアおよびその他の地域に向けて大量に動くようになり、黄金週による内需拡大効果は、最初の三、四年間に比べもはや乏しくなってしまった。しかし、観光による内需拡大の経験はなお記憶に新しく、そのため観光による経済発展は、紅色旅遊計画の実施と普及に際して疑う余地はなく、あらためて実証する必要もなかった。こうして、SARSが中国を直撃した二〇〇三年が過ぎ去ったばかりの二〇〇四年一月、鄭州でおこなわれた全国旅遊工作会議の席上、「七省市発展紅色旅遊鄭州宣言」が発表されたのであった。

次に文化的な見地から見ると、一九九五年前後に中国では回想ブームが盛り上がった。すなわち当時の知識青年による上山下郷[6]生活の回顧と追憶である。このブームのなかで、大量の知識青年の回想録や文革を回顧した作品が出版され、毛主席バッジや文革期の宣伝画などが商品として芸術市場に流通し始め、紅色をテーマとしたレストランなどの商業スペースが相次いで登場してきた。同時に、「紅色経典」文芸の書き直しもはやり始めていた。書き換えられた「紅色経典」は、大衆の興味を受け入れた内容となっていた。一般的な傾向として脱構築的、あるいはパロディ化があり、過去の革命史を革命の「野史」であるとし、原作にあった革命への清教徒的倫理観はリメークの際にはそぎ落とされ、革命のコンテクストにおいて以前には許されることはなかったラブシーンや男女間の情欲が多く暗示されるようになったため、「紅色」経典は次第に「桃色」や「黄色」へと変えられているといえる。例として『紅色娘子軍』[7]の書き換えを挙げよう。原作では洪常青と呉瓊花との革命的情誼は唐突に明かされ、二人の男女の愛情はかすかにしか示されていない。観衆はそれを推量することはできたが、作品自体のなかではあからさまにはされてはいない。新しい『紅色娘子軍』は洪と呉の二人のロマンスが基

調であり、娘子軍の物語の重点は、以前の「軍」から今度は「娘子」へと移っている。さらに、二〇〇三年版の小説『紅色娘子軍』では赤裸々な性描写がなされており、呉瓊花はセクシーな天性の美女として描かれ、洪常青のほかにも同じ村に流されてきた右派知識人と、入り乱れた不倫関係にある。[4] 過激さを増し、抑制を失った紅色経典改編の流行に対して、国家広播電影電視総局は、二〇〇四年四月に「『紅色経典』テレビドラマ改編関連問題への真剣な対応に関する通知」を公布する。「通知」は、紅色経典を「革命史を題材にかつて全国的に大きな反響を引き起こした名作」と定義し、撮影中あるいは撮影準備中の紅色経典作品に対する警告と規準とされた。紅色経典改編の流行は、紅色旅遊の草創期と時を同じくしており、紅色経典改編のなかで現れた問題は、後の紅色旅遊計画の実施過程の中においても、同様に出現するものであった。

紅色旅遊の主旨

二〇〇四年一二月、中共中央弁公庁、国務院弁公庁は共同で「二〇〇四～二〇一〇年全国紅色旅遊発展計画綱要」を発行し、紅色旅遊に対する全体計画を発表した。「綱要」は紅色旅遊の目的を「充分に革命的歴史文化資源を発掘し活用するため、紅色旅遊を積極的に発展させ、愛国主義と革命の伝統教育を広く展開し、偉大な民族的精神を強力に発揚、育成し、民族的団結力を不断に強化し、革命老区の経済社会の協調発展を推進する」とし、紅色旅遊を「中国共産党の指導のもと人民が革命と戦争の時期にうちたてた偉大な功績を記念すべき場所や事物を媒介に、それらが抱える革命史や革命の事跡、革命精神を内容として、旅行者を受け入れ追慕学習させ、遊覧に加わることをテーマとする旅行活動」であると規定した。そして四つの分野で紅色旅遊の現実的意味と歴史的意義を明らかにした。

(1) 新時代の愛国主義教育の強化、改善に有利。
(2) 革命的歴史文化遺産の保護と利用に有利。
(3) 革命老区の経済社会の協調発展の促進に有利。
(4) 観光業振興の新たなスポットの開発、発展に有利。

「綱要」は、紅色旅遊計画を二〇〇四～二〇〇七年と二〇〇八～二〇一〇年の二段階に分けている。一般的に指導的性格の綱領はいずれも先を展望する性格を有している。しかし、直接言及こそされてはいないが、この「綱要」ではそれ自体が発表される前から紅色旅遊という存在に合理性があったと、遡って承認を与えていたのである。「綱要」が発表された時、すでに二〇〇四年末であり、第一段階三年間の最初の三分の一はとうに過ぎていた。その意味からいえば、「綱要」もまた時代の要請によって生まれたものであった。すでに述べたように、紅色旅遊に関する系

統的な規格が正式に提起されたのは紅色旅遊の活動が始まってからであり、その潜在的な経済的効果はすでに明らかであった。中共中央と国務院が出した「綱要」は、業界がすでに始めていた紅色旅遊の実践を総括し格上げしたものであり、最高政府行政機関が政策法規を通して紅色旅遊を体制化し、一方では紅色旅遊を愛国主義の軌道上に積極的かつ正確に導いたのである。また、別の側面として紅色旅遊を総体的に配置することで管理強化をはかり、最大の利益をあげようとするものであった。

「綱要」に制定された具体的な紅色旅遊実施計画には、従来の「一つの中心」「二つの基本点[8]」「三つの代表[9]」「四つの基本項目[10]」など中国的特色が盛り込まれ、頭に数字を持つ短いフレーズで、主な内容が簡潔に要約されていた。「綱要」は「六つの発展目標[5]」、「五つの主要な任務」を定めた[6]。紅色旅遊発展の全体的な枠組みには「八分野の内容[7]」、一二の「重点紅色旅遊区[8]」、三〇の「紅色旅遊優良ルート」、一〇〇の「紅色旅遊経典景勝地[9]」が含まれている。

詳細に「綱要」を読むと、私たちは紅色旅遊の具体的な実施計画と公言されている目的意義とに食い違いが生じていることに気づく。「綱要」は紅色旅遊発展のいくつかの要因のうち経済面に関してはただ「革命老区の経済社会の協調発展を推進する」とだけ冒頭で述べている。老区とは「中国革命老区」の略称であり、共産党が土地革命戦争期（一九二七～一九三七年）と抗日戦争期（一九三七～一九四五年）に樹立した革命根拠地を意味し、共産革命の力量蓄積のための準備の場所であった。当時の情勢として、共産党の革命根拠地の多くは辺鄙で人目につきにくい農村であり、経済は立ち遅れ、交通は不便、敵に容易に発見されない場所に設けられた。一九二〇年代末から抗日戦争終結まで、これらの革命根拠地は共産党の革命陣地であったため、二重の損失に見舞われた。一つは、余裕のない物資がほとんど消耗されつくしたことであり、もう一つは、それに加えて国民党と日本軍によりくり返し襲撃、包囲討伐を受けたことである。通常、革命老区は共産党の活動地域に集中している。湖南、湖北、江西、安徽、河南、四川、陝西および後の抗日戦争期の華北などである。共産党はこの時期基本的にゲリラ戦術を用い、革命根拠地は共産党撤退後ほとんど破壊された。そして建国後は、老区の建設について考慮されることはなかった。紅色旅遊は老区の経済発展をうたってはいるが、「綱要」が規定した三〇か所の優良ルートや一〇〇の経典景勝地のなかで老区にあるものは半数にも満たなかった。これらのルートと経典景勝地の配置は、中共中央が「綱要」制定時に地域バランスを考慮して配置したことのあらわれであり、一部の景勝地の編入がかえって「綱要」の主旨に反することになってしまった。

例えば、新疆ウイグル自治区石河子市の新疆生産建設兵団軍墾博物館である。ここは一九五〇年代初めに新疆生産建設兵団が成立したことを記念するために建てられたものである。紅色旅遊の基本的なポイントは中華人民共和国成立以前における共産党の革命的伝統の宣伝であるのに、生産建設兵団は人民共和国成立以後の産物であった。一九四九年以降の中国の曲折、特に一九七〇年代末までの歴史を中共に関連させて回顧する場合はとりわけ慎重を要する。基本的な意図は、選択的記憶喪失であり、「棺を蓋いて事定まる」として触れることはできない。そのため、いわゆる記念活動ではテーマは基本的に建国以前における中共の苦難の過程が主であり、一九四九年から一九七九年までの三〇年間にわたるさまざまな事柄に言及されることは極めて少ない。そのため、紅色旅遊に新疆生産建設兵団が現れたことは唐突の感を否めないのである。

紅色旅遊発展の現状と現れた問題

二〇〇三年から二〇〇六年までの統計資料によって全国各省の観光収入を高い順に列挙すると、上位はほぼ経済が発達した北京、広東、上海、江蘇、浙江などとなる。[10] 紅色旅遊計画が実施されるようになっても、老区の集中する江西省などの観光収入の全体的な順位は上がっていない。当然、そこには老区が集中する省の観光関連施設の基本的な不備、スタートラインの低さなどが原因として挙げられる。しかし、紅色旅遊についての調査結果は、紅色旅遊重点都市や地区の経済効果が顕著に伸びていることを示している。二〇〇六年、国家旅遊局は江西、湖南、湖北、陝西、四川など一一省市自治区、および井岡山、韶山、延安、広安などの七つの紅色旅遊重点都市に対して統計とサンプリングによる追跡調査を行った。一一省市自治区の統計上の数字では、二〇〇六年の紅色旅遊参加者総数は一億三四〇五万八〇〇〇人に達し二〇・一九％の成長、総合的な観光収入は五二五億二八〇〇万元で二五・五四％の成長を見せている。[11] 同時に、紅色旅遊に対するメディアの注目度も依然大幅に上昇している。二〇〇四年から二〇〇七年の四年間で、紅色旅遊関連書籍は六〇点余、その主要な内容は政策法規、旅行ハンドブック、歴史的景観、景勝地紹介などである。中央による上から下への普及拡大とそれに呼応した地方との相互協力によって、例えば二〇〇六年一一月に開催された全国紅色旅遊ガイド・解説員大コンクールなどの活動を通し、紅色旅遊の宣伝と普及拡大は確実に推進されている。いくつかのウェブ・サイトも紅色旅遊関連の基本情報を集めている。そのなかでも次の二つが紅色旅遊の「バーチャル基地」となっている。ひとつは解放日報のサイト（http://www.jfdaily.com.cn/gb/node2/node171/

node54978/)、もう一つは中国紅色旅遊ネット（「中紅網」http://www.crt.com.cn）である。後者は首都のある報道機関のなかで、紅色旅遊に入れ込み、紅色旅遊を宣伝する志を共にした同僚たちがよりあって創設したものである。前者は「綱要」をもとに、集中的に紅色旅遊政策とその発展状況についての報道をまとめている。また後者は、紅色文化と愛国主義教育を昂揚させる「バーチャル基地」として新しいメディアの優越性を充分に活用し、「紅色」な話題に関する情報を集め、二〇種類の「紅色」がついた分類を列挙している。これらには、「紅色チャンネル」「紅色歌舞」「紅色書画」「紅色書簡」「紅色カレンダー」「紅色詩歌」「紅色コレクション」などが含まれ、ホームページから紅色文化復興の全体的状況をおおよそ把握できる。これらのメディアは、一面では革命の伝統を大いに宣伝し、旧世代の共産党員の人生と偉大な功績に思いを及ばせた。しかし別な側面として、有形の革命遺産が新たな市場経済のなかで経済的価値をにわかに際だたせるようになった。例えば、毛主席バッジや、文革期の絵画など、それらのコレクションは芸術品市場で価格が急騰している。

紅色旅遊の実践にあって、最も影響力があり、最も徹底的に貫徹され、最も効果が顕著であったものとして「長征の足跡をたどる」ことが挙げられる。前に述べたように、これはすでに半世紀の伝統があり、歴史的基盤と現実的基礎があった。二〇〇四年から二〇〇六年までの二年間、すでに個人や少人数のグループがこの擬似的「壮挙」を成し遂げていた。二〇〇六年には、中国中央テレビのニュース・チャンネルに『我が長征』という報道番組シリーズが登場した。インタビュー番組のキャスターとして有名な崔永元が司会を務め、社会のさまざまな階層、職業のなかから二〇名を募集し、長征の道沿いに関係する人々を自ら取材し、身を以て長征の艱難辛苦を味わい、テレビカメラのレンズを通して現地の風土や人情、過去七〇年の社会の変化を映し出すというものだった。『我が長征』では、長征の足跡をたどるとともに資金を募って一連の公益事業を主催し、長征の道沿いの貧困地区に小学校や図書館、病院などの公共施設建設を援助した。これは、その行動から見ると毛沢東が当時総括した長征精神、「長征は宣言書であり、長征は宣伝隊であり、長征は種播き機である」[12]を貫徹するものであった。この活動経費は自弁であり、中央テレビ局やその他政府組織からの資金援助は受けていない。しかし、主催者崔永元の有名人効果や中央テレビ局の中国メディアにおける「総領」としての地位から、経費の募金やニュース報道へみな大々的な支持があった。『我が長征』は中央テレビ局が全行程を追跡、報道し、放送時間の占有率は史上最高となり、中央メディアのプライム・タイムで最も多く放送された長征再現の活動となった。

メディアの報道と宣伝が人々に与えた印象では紅色旅遊は日ごとに盛んになり、火が燃え盛っているようであった。しかしながら、紅色旅遊には不協和音がすでに響きだし、芳しくない現象がいくつかのメディアに現れていた。まず、経済面では公金流用問題である。二〇〇七年五月、全国紅色旅遊工作協調小組弁公室は「国家旅遊局発展紅色旅遊工作総述」[13]を発表し、紅色旅遊が「綱要」発行以来生み出した経済、社会両面での利益を大いに認めた。しかし、紅色旅遊の市場化のあり方について、「工作総述」に収められているサンプリング調査の結果では別な問題があることを示していた。「二〇〇六年八、九月に、協調小組弁公室は五組のサンプリング調査グループを組織し、井岡山、韶山、延安、西柏坡と広安の五つの主な紅色旅遊地に赴き、サンプリング調査を行った。調査データによれば、上述の五か所の紅色旅遊社のうち、自費は二九・三%、公費は三三・七%、『一部自己負担、一部公費補填』は一九・九%を占め[14]、半数以上（五三・六%）の紅色旅遊は公費の流用が関わっていた。このように公金流用が高い比率を占めているものの、全国紅色旅遊工作協調小組弁公室は特に注意を払うわけでもなく、「工作総述」でも紅色旅遊での公費流用現象に対して警戒も制止もしていない。中共中央弁公庁と国務院弁公庁が、一九八六年二月一日という早い時期に「幹部の公費による旅行を断固として制止することに関する通知」を出しているにもかかわらず、一部の地方政府機関は紅色基地での愛国主義教育という名目で、公然と公費を流用して旅行を行っている。愛国主義の名目で公費支出による旅行が紅色に染まるというのでは、まるで名目が正しければそれで良しと言っているようなものではないか。

紅色旅遊活動を指導する中央機関である国家旅遊局などは、公費による紅色旅遊という現象に対して特に警戒をしてはいないが、すでに一部のメディアでは公費による紅色旅遊のもたらす危険について報道している。早くも二〇〇五年六月『市場報』[15]が、紅色旅遊における腐敗現象について報道をしている。公金流用以外に、この報道は紅色旅遊が紅色老区にもたらす法外な経済的な負担についてもはっきりと指摘している。福建省上杭県古田鎮党委員会書記邱偉勤は、春節以降に古田を訪れた旅行客は一万人を超え、大半を鎮政府が接待したという。「いちばん多い時、一回の昼飯で鎮政府が接待したのは三六〇人以上。三六テーブル。何でもかんでも食い尽くされてしまう！」。統計では古田鎮の一年の接待費用は少なくても一〇〇万元前後であるという。似たような現象は、その他の地域でも起こっている。江西省瑞金市は著名な紅色根拠地である。二〇〇五年、視察や愛国主義教育を受けるという名目で瑞金を訪れる機関部門は実に多く、市政府や旅遊など関連機関に接待

の負担が頻繁にもたらされている、と新任の瑞金市旅遊局局長謝永林もインタビューの記者に答えている。紅色旅遊の腐敗現象はすでに報じられているが、報道のエネルギーと尖鋭さにまだ欠けている。腐敗行為に関わる人名や職場の名はすべて匿名であり、これは現在の中国において腐敗対策が非常に困難な状態にあることと関わっている。

次に、紅色旅遊景勝地は観光客を惹き付け、最大限の経済的利益を得ている。しかし、これらの景勝地でとられているものは、業界の一般的な営業方式や大衆向けのやり方とかみ合うものではない。ある地域では、自らの中国現代革命史における地位を誇張したり歴史的事実を歪曲し、他の地域の価値ある歴史的事件を自分のところで起こったことにして、観光客に混乱をもたらしている。紅色文化の中における革命史上の事件や人物に対するパロディ化もおきている。こうした現象は、ある面においては、政治的圧力の低下と過剰な政治的雰囲気の緩和を反映している。しかし、別な面から言えば、従来の革命史はプロパガンダを目的に作られ、そのため英雄の人物像の描写や革命史編纂では「超人」的な英雄の姿と革命史の光輝さを過度に誇張し、英雄が「人」であることや革命の蹉跌に言及することはほとんどなく、その結果としての空白や遺漏は新しい時代の解釈によって補完されている。解説を行う際、一部の観光ガイドは、近年民間に流布している事実無根の「野史」や「ロマンス」によって革命における人物や事跡を説明したり理解したりすることがある。例えば、朝鮮戦争で犠牲となった黄継光は、突撃の最中に石につまずいて倒れ、ちょうど敵の銃眼を塞いだのだ、などの類である。[11] こうした社会主義時代の「誰よりもぬきんでて、誰よりも偉大で、何でもできる」[12]式の偶像化された英雄像に対するパロディは、いうまでもなく過去の社会主義思想教育に対する現代人の反逆の現れであるが、それと同時に、現在の市場経済体制下における道徳と社会的気風の退廃への不満の心理が引き起こしたものでもあり、毛沢東時代への懐旧に満ちている。これは「中国紅色旅遊ネット」の「紅色論壇」というサイトでいつでも見られる。

紅色旅遊に現れた多くの問題のなかで、四川省瀘州市の烈士陵園に関連した「一・一五事件」はしばしば人目につくことになり、最も重大視され批判を受け、徹底的な処分が加えられた事件であった。二〇〇五年一月一五日、中央テレビの番組『焦点訪談』の記者が行った瀘州市の忠山賓館への潜行取材により、ホテル内のアミューズメントパークで性的サービスが提供されていたことが判明した。そのホテルは、瀘州烈士陵園内の裏門左側にあり、右側は四川省の重要愛国主義教育基地である瀘州革命英雄記念碑であった。そして、ホテルと記念碑との距離はわずか二〇メートルばかりだった。一月二八日、『焦点訪談』は「艶

舞が飛び込んだ烈士陵園」と題してこれを報じ、大きな反響を呼んだ。実際のところ、中国で風俗営業はいくたび禁止されても止むことはなかった。しかし「瀘州一・一五事件」が特別であったのは、それがおこなわれた場所であった。それは烈士陵園内であり、革命烈士の遺体が眠る場所に位置し、革命のシンボル――英雄記念碑とはほんの数歩の距離だった。この後、忠山賓館経営者と収賄容疑の派出所員が処罰され、瀘州烈士陵園園長および瀘州市の公安局、文化局、民政局の指導幹部がみな行政処分と警告を受けた。この事件で重点的に指弾されたのは、現在中国に氾濫する風俗業ではなく、革命の遺産と革命烈士に対する冒瀆であった。中央メディアの関与があったとはいえ、ついには烈士陵園内の風俗営業は取り締まりを受け、革命の先烈がねむる地の神聖と純潔は回復された。しかし、この事件は、経済的利益に目がくらんだ行為が、苦心の末に打ち立てられた革命の倫理を打ち砕いてしまったことを表していたのである。

経済的利益は瀘州革命烈士陵園事件において、不名誉な役割を演じた。紅色旅遊が観光業の一部に属している以上、そのインプットとアウトプットは産業運営の基本的規則に則っていなくてはならない。しかし、一部の地方では行政機関の行き過ぎた干渉のため、紅色旅遊資源の開発とインプットは市場原理を無視し、総じて生態環境も考慮されていない。太行山脈に位置する山西省左権県[13]は、抗戦期、かつて左権が指導した八路軍総司令部の所在地であった。二〇〇六年春、個人経営登記された会社「小江南旅遊開発公司」が左権県麻田鎮の二十数畝の農耕地――その地の村民六二戸の糧食耕作地――を占拠して、人民元六三〇万元を投資したという「八路軍総司令部広場」を建設した。麻田鎮は八路軍総司令部所在地として国家重点文物保護単位とされていたのであったが、「八路軍総司令部広場」の建設で八路軍司令部の本来の様相は台無しになり、これにかわって大がかりですこぶる勇壮な建築景観が出現した。こうした、地方の利益を犠牲にし名誉欲にかられた建築は、紅色旅遊開発の主旨に完全に悖るものであり、もともと経済的に立ち遅れていた老区に負担を強いるものであった。失われたものは生きるよすがの田畑であり、これでは基本的生活すら保障することは難しい。巨額の資金を浪費しておこなわれた紅色プロジェクトは老区の人民に実質的な生活改善を何ももたらさなかったばかりか、最も基本的な生活と生産手段を奪い取ったのである。

総　括――共産主義から消費主義へ、革命から余暇へ

旅行の定義はさまざまである。しかし、旅行には間違いなく以下のような基本的要素が含まれている。(1)旅行とは

日常生活と地理的に隔たった地点にあり、(2)一定の場所の滞在期間が一年以下、(3)その内容と目的は、娯楽とレクリエーションである。観光業に対する学術的な関心は一九六〇～一九七〇年代に始まる。その歴史的背景に、大衆的観光業の発展と繁栄が経済水準の上昇と不可分ということがある。第二次世界大戦後、欧米は五〇年代の経済復興と六〇年代の政治思想の動揺を経て、七〇年代の政治的安定と経済成長に随い、ことに労働者の権利の保障と有給休暇制度の実施によって、観光業も日を追って発展していった。つまり観光業の発展とは社会構造の変化も、とりわけ「有閑階級」(leisure class) の興隆をも表しているのである。この「有閑階級」とは、かならずしも中産階級を指すものではないが、中産階級と重なる部分はとても多い。旅行という活動に参加する人々は、必ずしも中産階級に属しているわけではないが、しかし、旅行をし、休暇を過ごすということは中産階級の消費形態のひとつだった。観光人類学者ディーン・マッカネル[14]は旅行者からの視点に着目し、旅行という行為と旅行文化に対する創造的研究をなした。彼は旅行者を「一般的現代人の最良の模範である[16]」と見る。この「現代」という一言には、特に重要な意味が含まれている。旅行者とは現代社会独得のものではない。中世の聖地巡礼の信徒や近代ヨーロッパを遊学した貴族などの行動は、すべてみな旅行としての性格を有しているが、それは当時のある階級の特権であり、社会全体としては主流ではなかった。現代の大衆生活のなかでの旅行の普及とその意味は、これまでにないほど大きなものとなっている。旅行とは、資本生産が一定の蓄積水準に到達した後の余剰資本の処理方法であるということができる。消費とは継続的再生産ではない。同時に、多様な旅行方式もまた、知らず知らずのうちに現代意識の形成に影響を与えているのである。

革命史と観光業との成功裡の結合にはすでに先例がある。「フリーダム・トレイル[15]」がまさに良い例である。「フリーダム・トレイル」はボストン中心部のボストン・コモンからチャールズタウンにあるバンカーヒル記念塔までのルートである。路上には赤レンガと矢印がはめ込まれ、標識として四キロの道のりを貫き、一六か所のアメリカ独立戦争の重要な歴史的遺跡をつないでいる。この計画の最も早いものは『ボストン・ヘラルド・トラベラー』記者ウィリアム・スコフィールドが同紙特集欄に掲載したもので、ボストン市内の歴史スポットをつなぎ、遊覧客は一つの名所から別の古典へと歩いてゆくことができるというもので、ボストンの歴史遺産保護が主目的であった。「フリーダム・トレイル」は一九五八年に正式に実施され、まるで無形の大博物館のように、ボストンの革命史を総合的に陳列展示している。それは市内の歴史遺跡を結び、公共交通

機関はポイントごとに停留所を設け、沿線には専用の遊覧バスがあり、非常に便利である。このため、まもなくボストンを訪れる観光客が必ず立ち寄るようになり、現在では少なくとも毎年四〇〇万人の観光客を受け入れている。アメリカの歴史を広く知らせるとともに、ボストン市にかなりの経済的利益をもたらしているのである。

前世紀後半、欧米で旅行がいかに発展したのかを考えてみると、現在の中国における旅行現象の分析に参考とすべき意義がある。中国の大衆のうち消費としての旅行をおこなう階層の発生は一九八〇年代の改革開放以降のことである。有閑階級の形成は観光業自体の発展の前提であり、一九九〇年代中後期の中国の旅行の総体的な環境と七〇年代のアメリカは非常に似ている点がある。すなわち、可処分所得の増大と黄金週という長期休暇制度の実施である。これらは、中国の観光業界発展の大きな刺激要因となった。

経済的側面以外では、旅行とは多様なイデオロギーがひしめく場所でもある。旅行とは娯楽とレクリエーションであるが、その潜在的な作用を低く評価することはできない。楽しみを通じて教えること（「寓教于楽」）は、すでに古くからの教訓となっている。なぜならば、旅行は自分の住処（すみか）を離れることであり、その旅程は日常生活とは異なるものを体感し、見慣れない、新奇な、驚喜の世界であることを意味する。そして旅行とはたえざる接触であり、新しい事物を理解し認識する過程である。そこには、危険や誘惑、落とし穴も潜んでいる。一個の人間が経験する旅行は、旅立ちから帰還までひとつの円環を描き、ひとつの成長という循環を完成させる。「成長小説（ビルディングスロマン）」の主人公が例外なくこうした経験をすることは、まさしくその証左となろう。[17] それだけでなく、歴史叙事詩や神話の主要な人物は、苦難の旅を経てはじめて英雄となれるのである。誰もが知っているホメロスの叙事詩イーリアスやオデュッセイアのように。旅行は、進歩、知識と自由の追求、自我意識の確立の端緒を成長のために与えてくれるのである。[18] 旅行は、啓蒙教育と心身の娯楽とをあわせ持つのである。紅色旅遊は教誨と旅行との結びつきを強め、愛国主義イデオロギーの宣伝を特殊なテーマの旅行のなかに溶け込ませている。それが、旅行という娯楽とレクリエーション活動を通じて人心を陶冶し、愛国の熱情の志をかき立てようとしていることは、言うまでもない。ここで指摘すべきことは、旅行とはいつもの日常生活の状態ではなく、日常生活の対立物であり補完物であるということである。こうした意義から見て、紅色旅遊が掲げる「紅色」とは、中国の現在の日常生活に欠けたものなのである。もし、「紅色」が日常生活にとっくに溶け込んでいるのならば、旅行という非日常的活動を通して教導し、注意を喚起し、強化し体現する必要はない。言い換えるならば、旅行とは儀式化された行

為に満ちた活動であるといえよう。例えば、ある特定の場所に行って観光し、写真を撮り、さらには幸福を祈るという儀式的な行いを、日常生活のなかで尊重する必要はない。紅色旅遊の目的は旅行を通じた愛国心の育成にあるが、旅行は非日常的なものであり、それは「紅色」的感情が日常生活に欠如しており、常におこなわれてきた厳格な愛国主義教育の失敗を紅色旅遊の提唱者たちがすでに認めているということなのである。それゆえレクリエーションという方式、「紅色旅遊」という儀式的行為と娯楽性を通して人々に「紅色」意識を喚起し、愛国的情報を発信し、愛国心を強化せざるを得ないのである。

紅色旅遊が及んでいる面積は広く、中国の広大な領域の東西南北を覆い尽くしている。しかし、これは単なる自然地理的資源の統合ではない。より重要なことは、人民共和国の紅色の歴史が具体的に見てわかる地図記号の中に溶け込み、無形の紅色の歴史が有形の地理景観の助けを借りてしめされていることである。紅色旅遊は人民共和国の前世（歴史）と今生（地理）とを、旅行者の参観のために大陳列室にまとめて展示しているのである。紅色旅遊が規定したそれぞれの景勝地は、博物館の陳列品のように参観客に凝視され、額ずかれる。旅行者は、湖南省湘潭を訪れれば必ず韶山にある毛沢東の故居を訪れる。それはパリを訪れれば必ずルーブルで「モナリザ」を鑑賞するのと同じことである。

このように見てくると、紅色旅遊自体が矛盾した概念に満ちていることがわかる。一方では、紅色旅遊は革命の遺産が徐々に失われていくことを憂い、積極的に応急処置をとり、たゆまぬ努力で革命の遺産を保護するのである。しかし別な一面では、革命の遺産と旅行を結びつけたことで、革命の遺産を消費される無形の商品へと変化させてしまった。しかも、ひとたび革命の遺産を商品として市場の領域に流通させてしまえば、市場原理の機能に従わざるを得ない。革命の遺産の経済的利益を決定するのは市場であり、政治的手段による関与は市場主導の状況下では部分的な効果しかもちえず、市場の決定力をこえたり、それに取って代わることはできない。紅色旅遊は往事の革命の遺産を包装して旅行システムに組み込み、大衆の消費に提供した。このように、社会主義時代の共産（幻想としての理想が主軸）は、ポスト社会主義時代の消費（現実的な需要が中心）へ移行したのである。また同時に、紅色旅遊の目的は人心の改造であり、愛国主義教育の促進である。そして、その政治的使命は、以前の革命事業からひきついだ社会変革と同工異曲である。ただし、かつて命を捧げ熱血を注いだ革命という行為は、無情にも、現在においては物見遊山的レクリエーションの娯楽にかわられてしまったのである。

結語

二〇〇七年末、紅色旅遊の最初の発展段階（二〇〇四～二〇〇七年）が終わる。まさにこれは、紅色旅遊の成否について正確な判定と分析をする貴重な機会である。紅色旅遊が始まったばかりの頃は全面的な検証の術はなく、あわただしくスタートしてしばらくして一時的に停止してしまった状態だった。例えば、二〇〇三年のSARS後、重傷をこうむった中国経済には早急な回復が必要とされていたのである。折良く二〇〇四年と二〇〇六年は紅軍の長征開始終結六十周年記念の年であり、紅色旅遊推進のよい機会であった。しかし、ここ二年間に紅色旅遊とその他の紅色産業に現れた問題は、注目を集めるに足るはずのものであった。経験と教訓を総括し、相応の予防と管理の措置をとり、次の紅色旅遊計画に適切な調整をおこなうことは、課題の中に含まれていなくてはなるまい。本稿執筆中、二〇〇七年一〇月一一日から一三日にかけて、全国紅色旅遊工作協調小組弁公室は河南省安陽市において「中国の時代精神の傑出した代表――紅色旅遊の持続可能な発展」と題したシンポジウムを開催し、あわせて「安陽宣言」を発表し、紅色旅遊の発展は偉大な政治的、文化的、経済的プロジェクトであり、こうした偉大なプロジェクトは社会主義和諧社会の構築に積極的意義を有している、と指摘した。このたびのシンポジウムでは紅色旅遊に存在する問題について取り上げられはしたが、問題に対する総括はマクロ的かつ教条的であり、早急な解決が待たれていた公金流用や不合理な計画、恣意的な歴史の改竄など現実的問題は完全に回避された[19]。本稿を書き終えた一一月三〇日、『光明日報』は「時代精神によって紅色旅遊の新しい成長点を作り出そう」という長文の評論を発表した。それによると、紅色旅遊がすでにおさめた成果を高く賞賛し、紅色旅遊を時代精神の発揚にまで高めるという政治目標を貫徹するよう促している[20]。時代精神の提起は、紅色旅遊の計画者が努力して、紅色旅遊をひとつの伝統に作り上げたことを意味している。この伝統がモデル化され、普及し、中華民族のナショナリズム的心情強化の助けとなるだけでなく、現実的な経済的利益をもたらすであろうと期待されているのである。現代社会に存在する伝統の起原を探れば、不思議な思いに駆られるであろう。現代社会がよりどころにしている非常に多くの伝統は、元来がみな近現代の発明である。例えば、スコットランドのハイランド地方でのキルト[16]のように。大衆的伝統の発明には祝祭や旅行、儀式、服装、スポーツなどが含まれ、ナショナリズムと社会の中堅となる勢力、とりわけ社会の生産力の主要な推進者であり消費者――中産階級の成長と密接不可分なのである[21]。残念と言わ

ざるを得ないのであるが、最終的に政治との関係から離れることはできない。紅色旅遊の出発点は、老区の経済的発展という経済政策的決定であった。しかし実施されるにつれ政治的意義のほうが経済的意義より大きくなってしまった。つきつめていえば、紅色旅遊も旅行であり、産業であり、経済活動であり、市場原理に適合しなければならない。このような高圧的な政治の介入は、経済、社会両面での利益保証は困難になる。一方で革命の遺産の継承を意図し、一方で革命の遺産を生産力にするならば、ふたつの課題とも全うすることはきわめて困難であろう。

原注

〈1〉 老鬼『血与鉄』北京：中国社会科学出版社、一九九八年。

〈2〉 Harrison Salisbury, *The Long March: The Untold Story*, New York: Harper and Row, 1985.

〈3〉 〝長征筆会〟のなかの三本の中編小説。江奇涛「馬蹄声碎」、喬良「霊旗」、程東「夕陽紅」。『解放軍文芸』一九八六年第一〇期。

〈4〉 郭小東・曉剣『紅色娘子軍』広州：花城出版社、二〇〇三年。

〈5〉 ①二〇〇四～二〇〇七年、紅色旅遊参加者増加率一五％前後、二〇〇八～二〇一〇年、一八％前後達成。
②一二か所の「重点紅色旅遊区」設置。
③三〇か所の「紅色旅遊優良路線」完備。
④一〇〇か所前後の「紅色旅遊経典景区」の新設。
⑤革命史の重点文化遺産を発掘、整理、保護、展示、宣伝し国内の先進水準に並ぶ。
⑥二〇一〇年までに、紅色旅遊の収入総計一〇〇〇億元、直接的就業人員二〇〇万人を、間接的就業人員一〇〇〇万人を達成。

〈6〉 紅色旅遊の優良システム建設、交通、資源保護、普及宣伝、産業の運営システム完備。

〈7〉 ①新民主主義期の建党、建軍など重大事件を映し出し、中国共産党と人民の軍隊の創建初期の奮闘過程を展開する。
②中国共産党が土地革命戦争期に建設した革命根拠地、紅色政権を樹立した革命活動を映し出す。
③紅軍の長征における苦難の道程、不撓不屈、勇猛果敢な何ものをも恐れぬ革命的精神を映し出す。
④中国共産党が率いた人民の抗日救国、民族の危機を救った輝かしい歴史を映し出す。
⑤解放戦争期の重大戦役、重要事件と地下活動を映し出し、中国人民が自由解放を勝ち取り、全国的な勝利を奪取し、人民共和国を樹立した過程を繰り広げる。
⑥全国各民族人民が共産党の指導の下に、愛国的統一戦線を樹立し、一心同体に、共通の敵に奮い立ち団結した奮闘精神を映し出す。

⑦旧世代のプロレタリア階級革命家の成長の過程と偉大な功績、およびその偉大な人格、崇高な精神と革命的事跡を映し出す。

⑧各時代、全国において、重大な影響を与えた革命烈士の主要な業績を映し出し、彼らが民族独立と人民解放を勝ち取るため、犠牲をおそれず、英雄奮闘した崇高な理想と確固たる信念を顕彰する。

〈8〉 ①上海を中心とした「滬浙紅色旅遊区」のテーマは「天地開闢、党の創立」。

②韶山、井岡山と瑞金を中心とした「湘贛閩紅色旅遊区」のテーマは「革命の揺籃、領袖の故郷」。

③百色地区を中心とした「左右江紅色旅遊区」のテーマは「百色の衝撃、両江の紅旗」。

④遵義を中心とした「黔北黔西紅色旅遊区」のテーマは「歴史の転換、奇襲による勝利」。

⑤滇北、川西を中心とした「雪山草地紅色旅遊区」のテーマは「堅忍不抜、革命の奇跡」。

⑥延安を中心とした「陝甘寧紅色旅遊区」のテーマは「延安精神、革命の聖地」。

⑦松花江、鴨緑江流域と長白山地域を重点とした「東北紅色旅遊区」のテーマは「抗日聯軍の英雄、樹海と雪原」。

⑧皖南、蘇北、魯西南を中心とした「魯蘇皖紅色旅遊区」のテーマは「東進序曲、淮海の決戦」。

⑨鄂豫皖境界地域を中心とした「大別山紅色旅遊区」のテーマは「千里躍進、将軍の故郷」。

⑩山西、河北を中心とした「太行紅色旅遊区」のテーマは「太行の硝煙、勝利の曙光」。

⑪渝中、川東北を中心とした「川陝渝紅色旅遊区」のテーマは「川陝ソビエト区、紅岩精神」。

⑫北京、天津を中心とした「京津冀紅色旅遊区」のテーマは「人民の勝利、ひるがえる国旗」。

〈9〉 全国の各省・市・自治区と直轄市に分布しており、リストが長大になるため、ここでは一々列挙しない。

〈10〉 引用した数字の典拠は以下の通り。

「二〇〇三年旅遊行業経営統計報告」
http://www.cnta.gov.cn/news_detail/newsshow.asp?id=A20066201516375499713

「二〇〇四年旅遊行業経営統計報告」
http://www.cnta.gov.cn/news_detail/newsshow.asp?id=A20066219332534405 19

「二〇〇五年旅遊行業経営統計報告」
http://www.worldbydata.com/fenx/fenxview-7561.htm

「二〇〇六年旅遊行業経営統計報告」
http://www.wztour.gov.cn/ReadNews.asp?NewsID=2283

〈11〉 国家旅遊局「大力発展紅色旅遊支持革命老区建設――国家旅遊局発展紅色旅遊工作総述」http://www.crt.com.cn/news2007/News/quanwei/2007-5/15/051522768_3.html

〈12〉 毛沢東「関于目前政治形成与党的任務決議」毛沢東文献資料研究会編『毛沢東集』第二版、第五巻、二一頁、東京：中村公省（蒼蒼社）、一九八三年。

〈13〉 http://www.crt.com.cn/news2007/News/quanwei/2007-5/15/05152768_3.html
〈14〉 同右。
〈15〉 郝涛「紅色旅遊——公費旅遊堂而皇之内鬼蚕食紅色資源」『市場報』二〇〇五年六月二四日、第三面。
〈16〉 Dean MacCannell, *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*, Berkeley: University of California Press, 1999, p. 1.
〈17〉 「成長小説」に関する全面的な分析は、Franco Moretti, "The *Bildungsroman* as Symbolic Form," *The Way of the World: The Bildungsroman in European Culture*, New York: Verso, 2000, pp. 3–13.
〈18〉 Georges Van Den Abbeele の旅行の意義に関する記述は、*Travel as Metaphor: From Montaigne to Rousseau*, Minneapolis: University of Minnesota Press, 1992, p. xviii.
〈19〉 国家発展改革委員会国土地区旅遊計画発展中心主任の石培華は、紅色旅遊における問題をまとめて一〇個の不対称であるとした。それは認識と目的の不対称、抑制と発展の不対称、資金と戦線の不対称、建設と規準の不対称、歴史と生活の不対称、形式と内容の不対称、号令と動作の不対称、体制と規律の不対称、政府と市場の不対称、理論と実践の不対称である。
〈20〉 http://www.crt.com.cn/news2007/News/hsyj/2007/1012/07101295547 97DGCD75GIE77369ID1E.html
〈21〉 Eric Hobsbawm, "Introdcution: Inventing Tradition," *The Invention of Tradition*, eds. Eric Hobsbawm and Terence Ranger, New York: Cambridge University Press, 1984, pp. 1–14.

訳注

(1) 中央紅軍の陝北到着前、徐海東は陝北にいた紅軍遊撃隊の劉志丹と対立し、劉を粛清しようとしたことがあったが、直接の軍事的衝突はない。
(2) 原文「憶苦思甜」。文革期にしばしば使われたスローガンのひとつ。「解放」前の苦しみを思いだし、現在の嬉しさに思いいたること。自分たちを解放してくれた毛沢東と共産党に感謝する意味を込めている。
(3) Edgar Snow, *Red Star over China*, London: Gollancz, 1937. Left Book Club edition. 中国では『西行漫記』のタイトルで同年に訳本が出版されている。なお、本稿原文では『紅星照耀中国』と直訳を記している。日本語訳は松岡洋子訳『中国の赤い星』(ちくま学芸文庫、一九九五年)が比較的入手しやすい。
(4) 日本語訳は、ハリソン・E・ソールズベリ著、岡本隆三監訳『長征——語られざる真実』時事通信社、一九八八年。
(5) 一九三五年五月、主力紅軍の長江渡河作戦地のひとつ。激戦と伝えられる。
(6) 文革期、労働者農民に学べとの毛沢東の呼びかけで始まった運動。都市青年が農山村や漁村などに移り住んだ。
(7) 『紅色娘子軍』は、一九三〇年代初めの海南島を舞台

にしたソビエト区創成の物語。中共瓊崖特委の指導下、革命根拠地をつくった。作品は一九五〇年代から、映画、演劇などで上演され、主人公吳瓊花（瓊は海南島の別名）が共産党員洪常青（常青は常に青いつまり「永遠の青年」の意味）の指導によって階級意識を自覚し、変革主体となる様子を描いている。文革期には、江青によって「白毛女」などとともに革命模範バレエに仕立てられた。

(8) 一九八七年、中共一三全大会で採択された党の基本路線。「一個中心」は経済建設を活動の中心に据えること、「両個基本点」は、「四項基本原則」と改革開放を堅持すること。

(9) 二〇〇二年、中共一六全大会で江沢民が提起したもの。共産党は先進的な社会的生産力の要請、先進的文化の発展、広範な人民の根本的利益の三つを代表するというもの。

(10) 一九七九年、鄧小平がおこなった講話のタイトルによる。社会主義の道、プロレタリア階級独裁、共産党の指導、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の四項目。

(11) 黄継光（一九三〇―一九五二）。朝鮮戦争に中国が派遣した人民志願軍の一員。一九五二年一〇月の江原道金化郡上甘岭戦役で、敵機関銃座の破壊を黄継光が志願し、自らの身体で敵の銃口を塞ぎつつ、銃座に爆弾を投げつけ破壊し、犠牲となった。死後、人民志願軍特級英雄および朝鮮民主主義人民共和国英雄の称号を受け、さらに生前の申請が受理されて中共党員となった。黄継光は日頃から軍務に精励し、いかなる武器も扱え、休日には近隣の働き手のない農家の手助けをするなど、無私の行為で知られていたという。

(12) 原文「高、大、全」。文革期によく使われた標語。革命的な永遠の理想像。

(13) 一九四二年五月、八路軍副参謀長左権（一九〇五―一九四二）が山西省遼県麻田鎮で戦死し、これを記念して同県を左権県と改名。同地に八路軍前方総司令部と中共中央北方局が拠点を置いたのは一九四〇年一一月。同県は晋冀魯豫辺区の一部。なお、八路軍第一二九師団が同地に進駐したのは一九三七年一一月。

(14) Dean MacCannell. ディーン・マッカネルは、一九六九年コーネル大学 Ph.D. 現在 Professor and Chair of Landscape Architecture at the University of California, Davis. なお、本書の初版は一九七六年。本稿の著者は、第五章に新たに一九七三年執筆の論文を加え新版とした一九九九年版を用いている。

(15) フリーダム・トレイルは、一九五八年、地元市民の発案でボストンを市民と観光客によりよく知らせる目的で設置された。

(16) "kilt"。原文「短裙」。格子柄のひだスカートで、主に男性用。

（邦訳　湯原健一）